

## 江南製造局草創期に建造された軍艦について

松浦 章

### 1 緒 言

近代中国の洋務運動時期において、機械工業、造船工業、兵器製造等を展開した重要な工場に、1865年（同治四）に李鴻章によって上海の虹口において設立された周知の江南製造局があった。<sup>1</sup>

江南製造局は、機器、鑄鉄、鑄銅、造船、兵器製造の他に翻訳部門を持つ重工業の最先端の工場であった。特に江南製造局の翻譯館の事業については、既に内田慶市が『近代における東西言語文化接触の研究』において、その業務の概要を紹介し、質の高い翻訳がおこなわれ、そ

---

<sup>1</sup> 魏允恭『江南製造局記』1905年。

全漢昇「清季江南製造局」『歴史語言集刊』23

北山康夫「中国に於ける官営軍事工業の一考察—江南製造局を中心として—」『ヒストリア』（大阪歴史学会）9号、1954年8月、1～8頁。

細見和弘「光緒新政期における官弁軍事工業の再編過程—江南製造局の移転問題をめぐる清朝中央政権と地方勢力間の対抗とその結果」『東洋史苑〔故小野勝年博士追悼号〕』（龍谷大学東洋史学研究会）第34・35合併号、1990年3月、205～226頁。

橋本敬造「ジョン・フライヤ-「江南製造局翻譯事業記」訳注」『関西大学社会学部紀要』第23巻2号、1992年3月、1～29頁。

橋本南都子「清国江南製造局翻譯館の設立とその歴史的役割」『東海大学紀要 外国語教育センター』（東海大学外国語教育センター）第12輯、1992年3月、69～75頁。

大原信一「江南製造局翻譯館 訳書事略」『東洋研究』（大東文化大学東洋研究所）第129号、1998年11月、1～13頁。

Thomas L. Kennedy トーマス・ケネディ著、細見和弘翻訳「李鴻章と江南製造局(1860-1895)」『立命館経済学』第59巻第1号、2010年5月、98～113頁。

Thomas L. Kennedy トーマス・ケネディ著、細見和弘翻訳「江南製造局:李鴻章と中国近代軍事工業の近代化(1860-1895)」(1)『立命館経済学』第59巻第3号、2010年9月、382～393頁。

Thomas L. Kennedy トーマス・ケネディ著、細見和弘翻訳「江南製造局:李鴻章と中国近代軍事工業の近代化(1860-1895)」(1)『立命館経済学』第59巻第4号、2010年11月、537～547頁。

の中には東洋学の泰斗藤田豊八も一時期参画していたことを指摘している。<sup>2</sup>この江南製造局の翻訳事業に関しては多くの業績があるが、造船に関しては等閑視されてきた。そこで江南製造局の初期において造船された船舶に関して述べてみたい。

この江南製造局における造船の状況に関して、1872年8月(同治十一年七月)に刊行された『中西聞見録』第1号の「上海近事」によれば、

拋上海新報云、江南船廠製造局、工匠甚夥、先曾造出兵船四隻、近復添造許多新式船隻、現聞造成大兵船一隻、船中可安炮二十四位、有蒸釜四踊、氣機二具、此船初就、尚未放洋、即按其式更造一隻以成雙、大約後造者於明春亦可放洋、又造小鐵船二隻、長六丈、寬丈二、吃水四尺餘、有暗輪二具、首尾均尖。<sup>3</sup>

とある。

『中西聞見録』は『上海新報』に掲載された記事を転載して、江南製造局の造船状況について述べている。これには江南船廠製造局においては、工員の人数は多く、先に軍艦を4隻造船し、また最近幾つかの新式の船隻を造船することになっており、その軍艦には24個の大砲を装備し蒸気釜が4個と機関を2つ備えているものがあつた。さらに小型の鉄製の船を2隻建造することになっており、それは長さ6丈、幅1丈2尺、吃水が4尺余りで、動力は舷側に水車を2個装備した輪船で、船体は船首、船尾俱に細身であるとする記事であつた。このように江南製造局の造船に関して社会からその動向が注目されていたのである。

そこで本稿では、江南製造局の初期に造船された船舶について述べてみたい。

## 2 江南製造局の造船事業

上海に関する地方志に見られる江南製造局の記録を若干掲げてみたい。

同治十一年(1872)『上海縣志』卷二、建屋、附製造局に、

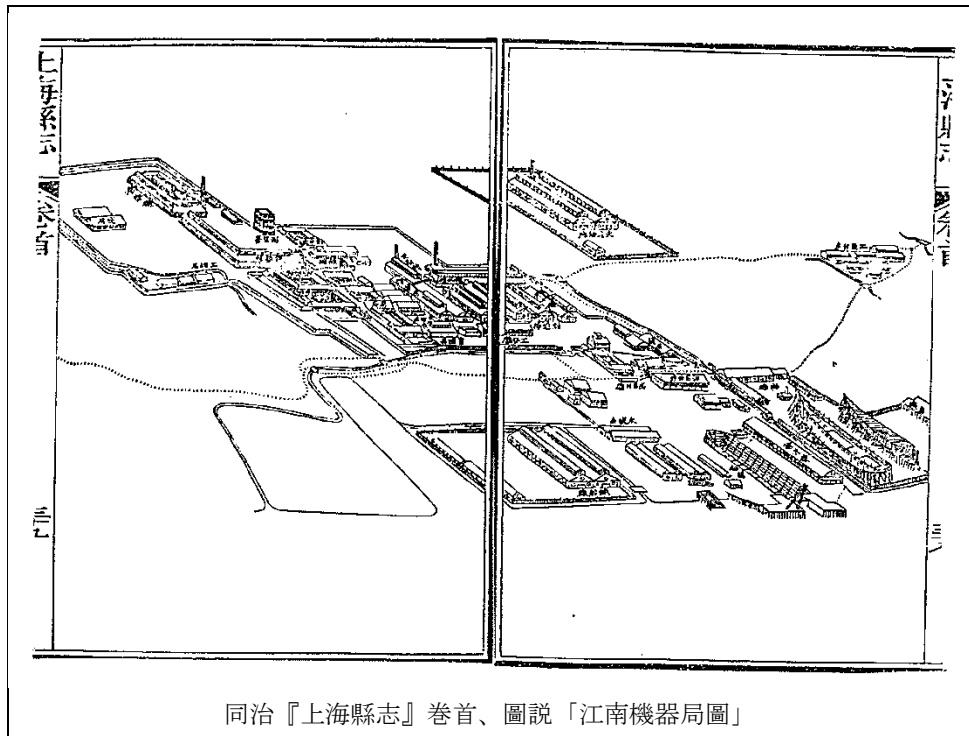
製造局、在城南高昌郷、同治初元、巡撫李鴻章由滬濟師恢復江浙、得洋槍・礮彈力居多、令在滬設局鼓鑄、初僦居浦北虹口洋房、名機器局。五年、巡撫丁日昌奏請擴充、巡道應寶時、籌撥經費、移建今處、計地七十餘畝、爲局房及製造之所、以四十餘畝、設船廠・船塢・馬頭、及洋匠住房、其中匠住房、則另於廠東購地五畝、蓋造焉。八年秋續遵奏定章程建建繙譯館於西北隅、以廣方言館、生徒移埒。九年春又西北、添建洋槍及氣機・熟鐵捲槍等廠、其大氣錘鐵殼船廠、及測望臺等處、皆續增尚未訖工、統計方廣凡四百餘畝

<sup>2</sup> 内田慶市『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学東西学術研究叢刊17、2001年10月、308～314頁。

<sup>3</sup> 『中西聞見録』南京古舊書店、1992年6月、第1冊(全4冊)53頁。

云。<sup>4</sup>

とあり、光緒十年（1884）『松江府續志』卷八、建屋志、官署<sup>5</sup>にも同様な記事を掲げている。



同治『上海縣志』卷首、圖說「江南機器局圖」

江南製造局は、上海縣城の南にあった高昌郷において産声をあげた。その後、徐々に各部門の業種を拡充していった歴史が素描的に記録されている。民国二十五年（1936）『上海縣志』卷一、紀年の同治六年（1867）の条には「建江南機器製造局於城南浦岸」<sup>6</sup>と簡単に記している。その規模を描いたものが同治『上海縣志』圖說「江南機器局圖」に見える。

この江南製造局が中国で本格的な造船を行うのであるが、その草創期の記録が次の曾國藩の同治七年（1868）九月初二日付の奏摺に見られる。

…竊中國試造輪船之議、臣於咸豐十一年七月覆奏購買船砲摺內即此說。<sup>7</sup>

とあるように、清朝中国が独自に輪船を建造する議論は咸豐十一年（1861）よりあった。しかし進捗せず、時間が経過した。

至六年四月、…查造輪船以瀛爐、機器、船壳三項爲太宗、従前上海洋廠自製輪船、其瀛爐

<sup>4</sup> 『上海縣志』、中国方志叢書・華中地方・第169号、成文出版社、1975年、第1冊（8冊）205～206頁。

<sup>5</sup> 『中國地方志集成 上海府縣志輯』③、上海書店、1991年6月、211頁。

<sup>6</sup> 『中國地方志集成 上海府縣志輯』④、上海書店、1991年6月、29頁。

<sup>7</sup> 中国史学会主編『洋務運動』第4冊（全8冊）、上海人民出版社、2000年6月、16頁。

機器均係購自外洋、帶至内地装配船壳、…<sup>8</sup>

と、輪船の建造にはボイラーとエンジンそれに船体が無くでは成立しない。上海洋廠が自前で製造するがエンジンや機械類は外国から購入して船体のみを国内で製造したことがあった。しかし、

此次創辦之始、考究圖說、自出機杼、本年閏四月間、臣赴上海察看、已有端緒。七月初旬第一號工竣、命名曰恬吉輪船、意取四海波恬、廠務安吉也。其瀛爐・船壳兩項、均係廠中自造、機器則購買舊者修整參用。船身長十八丈五尺、闊二丈七尺二寸、先在吳淞口外試行、由銅沙直出大洋、至浙江舟山而旋。復於八月十三日駛至金陵。臣親自登舟、試行至采石磯、每一時上水行七十餘里、下水行一百二十餘里、尚屬堅緻靈便、可以涉歷重洋。<sup>9</sup>

とあるように、今回が最初の造船として設計図から始められ、同治七年（1868 七月初旬に、第1号の汽船を造船したのである。その汽船が、曾國藩によって命名された「恬吉」である。ボイラーと船体は自力で製造されたものである。しかしエンジンは中古製品を購入して修理したものである。船体は長さ 18 丈 5 尺、船副 2 丈 7 尺 2 寸の大きさであった。最初に長江口付近の吳淞口から試験航行して東シナ海を進み浙江省の東北沖合いにある舟山列島まで往復した。その後また八月十三日には長江を遡江して南京まで行くことになり、曾國藩も試乗して采石磯まで赴いている。恬吉は長江を航行するに際して、1 時間に遡江する距離は 70 余里、下航には 120 余里の速度で運航していたのである。

つづいて同治八年（1869）に第二番目の輪船が竣工する。同治八年六月十五日付の兩江總督馬新貽の奏報によれば次のようにある。

本年四月、據報稱第二號輪船係仿照外國暗輪兵船式樣製造完工、先由吳淞江口出洋試行、馳至浙江舟山旋回上海、沿途察看船上機器尚覺穩利。即經駛至金陵、臣親自登舟驗試、工料極為堅緻、船身長十八丈、船面寬二丈七尺八寸、可以安砲八尊。即令開駛至采石磯而回、往返幾及二百里、不過兩時有餘、機器小而靈動、在長江行駛尤為便利、取名曰操江輪船。<sup>10</sup>

とある。第 2 号の輪船は外国の外輪型軍艦の形式によって完成した。その試運転が行なわれ、長江口の吳淞江口より出航して浙江省の舟山列島まで行き上海に戻る航路において行なわれた。その試運転の間、洋上において船の機器などの検査が行なわれ順調に稼働しているのを確認した。そして直ちに金陵即ち南京まで長江を遡江したのであった。今回は馬新貽が乗船して試運転を検査して、建造状態が良好であることを確認した。この船は船長が 18 丈、船腹が 2 丈 7 尺

<sup>8</sup> 中国史学会主編『洋務運動』第4冊、17頁。

<sup>9</sup> 中国史学会主編『洋務運動』第4冊、17頁。

<sup>10</sup> 中国史学会主編『洋務運動』第4冊、22頁。

8寸あって、8門の大砲を装備していた。試運航は采石磯までの往復ほぼ200里を2時間たらずで航行し、機器は小さいが順調に起動し、長江を航行するのに極めて便利であることが判明した。この兵船は操江と名付けられたのである。

『江南製造局記』によれば、

謹按上海製造局、同治四年五月初、購洋人機廠、在虹口開辦、六年夏、始移城南高昌廟鎮、分建各廠、曰機器廠、其樓上曰洋槍樓、曰汽爐樓、…繼建輪船廠、築船塢、…光緒元年、改汽爐廠爲鐵船廠、繼又鍋爐廠。<sup>11</sup>

とあるように、江南製造局における造船部門の拡充は同治六年（1867）夏に上海縣城の南の高昌廟鎮に移設し、そこにボイラー部門が設けられ、汽船工場やドックが完成したことに始まる。そしてボイラー部門が鉄船工場として拡充されたのであった。

このような時期における李鴻章の光緒元年（1875）十月十九日付の奏摺「上海機器局報銷摺」<sup>12</sup>によれば、江南製造局の事業としては、輪船の造船と鉄砲や大砲の製造、火薬や弾丸の製造、製造用の機器の製造、外国の科学技術書籍などの翻訳などを行っていたのであった。とりわけその事業の最初のものが汽船の造船であった。同奏摺によれば、

一曰、輪船開造之始、精挾程式、詳繪表裏、成算既定、將船殼鍋爐汽機、分爲三門、以洋匠三人、領工華人數百、且助且學、經年累月、始得入水、配用已造成者、爲惠吉、操江、測海、威靖、海安。木兵船五號、海安丈尺加廣、實馬力千八百匹、巨礮二十、兵丁五百、在外國爲二等、在內地爲巨擘。又成鐵殼小輪船三號、其造而未成者、爲海安同式之第六號兵船、夾板商船、小鐵甲兵船、目今海上要需、無如鐵甲、自當因勢利導、速求進益、冀日起而有功、以補購致之不足。<sup>13</sup>

とある。輪船即ち汽船の建造は船体の製造、鍋炉即ちボイラーの製造、機関の製造の3部門に分かれていた。それを外国人技師3人が数百人の中国人労働者を指揮して造船を行なったのである。その結果、造船されたのは、惠吉、操江、測海、威靖、海安の5隻の木造軍艦であった。とりわけ、海安は最大の規模であり、その馬力は1,800馬力にのぼった。そして大砲20門を搭載し、そして乗員としての水兵500名を乗船することが可能であった。海安は当時の世界では2番目の大きさを誇り、中国国内ではもちろん最大級であったのである。このほかに計画中的のものとして、鉄製小型汽船が3隻、第6番目の軍艦として海安と同船式のもので造船中で、さらに西洋式帆船<sup>14</sup>と小型鉄製軍船が計画されていたのである。

<sup>11</sup> 中国史学会主編『洋務運動』第4冊、73頁。

<sup>12</sup> 『李鴻章全集』第2冊（全9冊）、海南出版社、1997年9月、875～876頁。

<sup>13</sup> 『李鴻章全集』第2冊、875頁。

<sup>14</sup> 松浦章著、卞鳳奎譯「日治時期臺灣の西洋型帆船」『臺灣文獻』第58卷第2期、2007年6月、265

江南製造局造船一覧 表 1<sup>15</sup>

船名	船幅	全長	喫水	馬力	トン数	製造年	西暦
恵吉	27尺2寸	185尺	8尺	392匹	600トン	同治七年	1868
操江	27尺8寸	180尺	10尺	425匹	640トン	同治八年	1869
測海	28尺	175尺	10尺	431匹	600トン	同治八年	1869
威靖	30尺6寸	205尺	11尺	605匹	1,000トン	同治九年	1870
海安	42尺	300尺	20尺	1,880匹	2,800トン	同治十二年	1873
馭遠	42尺	300尺	21尺	1,800匹	2,800トン	光緒元年	1875
金甌鐵甲船	20尺	105尺	7尺	200匹		光緒二年	1876
保民鋼板船	36尺	225尺3寸	14尺3寸	1,900匹		光緒十一年	1885
船名	船幅	全長	喫水	馬力	石炭消費 1時間1トン	製造地	
南琛	38尺4寸	277尺8寸	15尺	2,800匹	1トン1,600斤	ドイツ	
南瑞	38尺4寸	277尺8寸	15尺	2,800匹	1トン1,600斤	ドイツ	
寰泰	36尺	206尺	18尺	2,400匹	1トン1,100斤	閩廠	
鏡清	36尺	206尺	18尺	2,400匹	1トン1,400斤	閩廠	
開濟	36尺	265尺	19尺	2,400匹	1トン1,400斤	閩廠	
龍驤	21尺4寸	92尺	7尺2寸	60匹	450斤		
虎威	41尺4寸	92尺	7尺2寸	60匹	450斤		
飛雲	24尺	100尺	7尺2寸	66匹	550斤		
策電	24尺	100尺	7尺2寸	66匹	550斤		
登瀛洲	35尺5寸	204尺4寸	13尺	150匹	1,340斤	閩廠	
普陀	18尺	100尺	9尺	55匹	410斤		

江南製造局が造船した汽船について上記の船舶と他の船とを表1に示した。江南製造局の草創期に造船された恵吉、操江、測海、威靖、海安、馭遠の船舶はどのように利用されたのだろうか。

～282頁。

<sup>15</sup> 「江南製造局」『洋務運動』第4冊、125～126頁。

黎庶昌の光緒二年（1876）刻本『曾文正公年譜』卷十二によれば、

辛未同治十年公六十一歳

十月初六日 至松江府、閲提標八營、選練新兵二營・洋鎗隊三營、

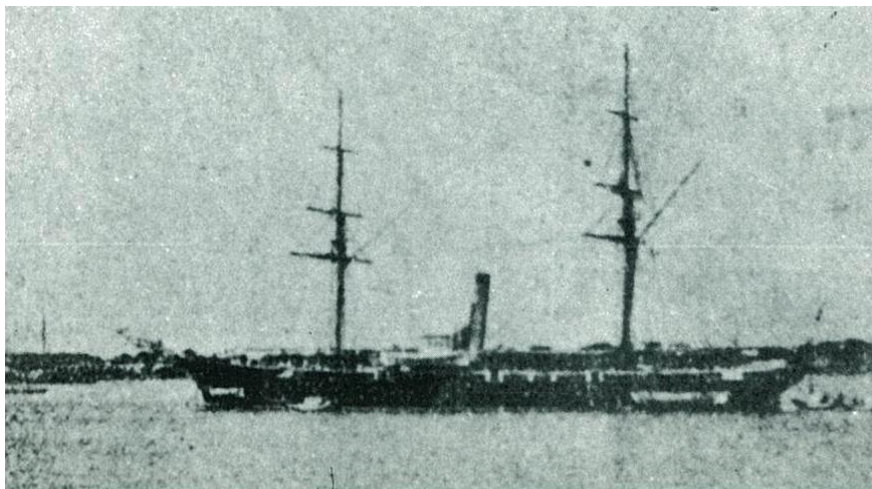
初七日 至上海、査閲鐵廠輪船・機器、洋領事官來見

十一日 至吳淞口、閲吳淞川沙南匯等八營、外海艇船六營、内洋八團舢板五營、并閲輪船新陣鐵廠、造成輪船四號、曰恬吉、曰威靖、曰操江、曰測海、皆公所命名也。

十三日 乘威靖船、且操且行。

十五日 改登測海船、回金陵署。

とあり、曾國藩が 61 歳の同治十年（1871）十月中旬に、新造された輪船に試乗した。新造の 4 隻の輪船名は全て曾國藩が命名したとされる恬吉、威靖、操江、測海であった。この内、威靖に十月 13 日に試乗し、ついで十五日は測海にも搭乗している。



操江輪船 北洋艦隊補給船

（彭德清主編『中国船譜』人民交通出版社、1988 年 12 月 108 頁）

薛福成『庸庵文編』續編卷上に見る「代李伯相張尙書籌議懾服鄰邦先圖自強疏壬午」に、壬午年光緒八年（1882）の奏文に、清国が自力で造船した汽船が北洋、南洋において兵船として活動している。

此外北洋之船、凡七分、駐旅順・天津者、曰揚威、曰超勇、曰威遠、曰操江、曰鎮海。駐煙臺者曰泰安。駐牛莊者、曰湄雲。南洋之船、凡十五、駐江甯者、曰靖遠。曰澄慶、曰登瀛洲。駐吳淞者、曰測海、曰威靖、曰馭遠。駐浙江者、曰元凱、曰超武。分駐福建之臺灣、廈門各口者、曰伏波、曰振威、曰藝新、曰福星、曰揚武。近因越南多事、由船政派赴廉瓊

洋面、巡防者、曰濟安、曰飛雲、合計兵輪二十二號。其中有馬力僅一百匹内外、未可充戰船者、如泰安、操江、湄雲等船、祇可轉運糧械、馭遠則已朽、敝須加修理、惟北洋之超勇、揚威兩快船、南洋之超武、揚武、澄慶等船、較爲得力、此中國戰艦之大略也。

とあるように清朝の海軍は北洋と南洋に分け、北洋には旅順・天津に駐在する揚威、超勇、威遠、操江、鎮海が、煙臺には泰安、牛莊には湄雲が配属されていた。他方南洋艦隊には江寧即ち南京に駐在する靖遠、澄慶、登瀛洲が、長江口にあたる吳淞には測海、威靖、馭遠が、浙江には元凱、超武が、福建は臺灣と廈門の各口を守備する伏波、振威、藝新、福星、揚武が配属され、この時期、越南すなわちベトナムとの問題が多いとして海南島から雷州半島にかけての海域を防備するために濟安、飛雲の軍艦が配備された。これら全てで「兵輪二十二號」と、広域にわたる中国の沿海海域全域を守備する軍艦であった。この22隻の軍艦であるが、旅順・天津に駐在する操江、吳淞にあつて長江口を守備する測海、威靖、馭遠の3隻は、江南製造局が建造当初に造船したものであった。

特に操江は、北洋海域において活躍している。李鴻章『李文忠公奏稿』卷四十六、「登瀛洲輪船留巡朝鮮片光緒九年二月初八日」によれば、

水師統領丁汝昌、督率訓練、以備鐵艦、到後分配操巡、並延英國水師副將琅威理、幫同丁汝昌、將應辦事宜、隨時查察、會商稟辦、並令帶領威遠・超勇・揚威・操江等船、逐日在旅順煙臺一帶洋面、嚴勤操練、以期熟習風濤沙綫、漸成勁旅、只可為朝鮮陸軍遙助聲勢未便。<sup>16</sup>

とあり、光緒九年（1883）水師統領丁汝昌のもとに北洋艦隊に所属する威遠・超勇・揚威・操江等船が、遼東半島の南岸の旅順から山東半島北岸の烟台までの海域においてイギリス海軍の指導を得て軍事訓練をおこなっていた。しかしながらこれらの艦隊のみでは朝鮮の陸軍を応援するには不十分であるとみなされていた。

### 3 江南製造局建造軍艦と日本

以上の汽船で日本との関係があったものについて触れてみたい。

最初に明治13年（1880）10月付で記された海軍大尉曾根俊虎の『清國軍艦一覧表』<sup>17</sup>を掲げたい。その中に先に述べた江南製造局初期の汽船について記されている。同書の解説に曾根俊虎は次のように記している。

隣國ノ情實豈悉サザル可ケンヤ。況ンヤ兵備ヲヤ。余在清遊學ノ餘暇、先ヅ海軍ノ艦船等

<sup>16</sup> 『李鴻章全集』第9冊、1398頁。

<sup>17</sup> 国立公文書館・内閣文庫所蔵（番号：和45699、冊1(1)、函：189/191）。



ヲ識ランコトヲ欲シ、竟ニ友人周・黄・趙等カ説ク所、及駐申品川總領事ノ調記、其他自己ノ目撃トニ依リ、艦名等ノ漢未タ詳ナラサル者ハ本邦ノ字ヲ以テ記シ、借リニ這表ヲ作レリ。然レトモ其大小速度・費炭等ニ至テハ固ヨリ悉ス能ザルヲ以テ備ルヲ後人ニ托ス。加ルニ現今海軍隆盛ニ至テハ最モ變シ易シトス。惟思フニ大砲ノ如キハ阿摸斯士侖五ノ三ニ居リ、克留布ノ如キ其一ナラン。又小銃ノ如キハ上海製禮明頓五ノ三ナルバシ。然而英國製カツトリンク砲及廣東製カツトリンク砲等ヲ載スル者ハ十ノ六七ナラン乎。

明治十三年十月申江客舎ニ誌ス

海軍大尉 曾根俊虎

とある。同表はタテ 48cm、横 89.5cm の一枚物に印刷されている。海軍大尉曾根俊虎は清國に派遣され清國軍艦の状況を調査した。その調査源は中国人の友人の周・黄・趙等であり、上海の総領事品川忠道そして自己の調査などによってこの表を作成したのであった。

曾根が清國へ出張していたことは、

清国出張中探偵費精算之申出

一 千七百〇七元四十九錢一厘

但探偵之為ニ消費シタル総高也

一 千五百圓 日本銀貨新舊混合 内三百円ハ百円ニ付二元引ニテ交換。

千貳百円ハ百円ニ附七元引ニテ交換。

該洋銀合計千四百拾元也。

但千五百圓ハ出立前探偵費トシテ本省ヨリ受取リタル者。

該銀差引不足貳百九拾七元四拾九錢壹厘。

右之通り相違無之候條、別紙証書一号ヨリ拾号相添差出候間、至急御精算被下度候也。

十三年十一月十七日

海軍大尉曾根俊虎

同 伊東蒙古

海軍卿榎本武揚殿

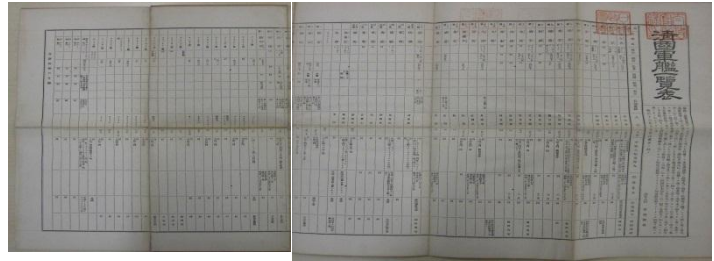
書面申出之趣、探偵上實際所要ノ事由、毎項明記シ、更ニ可申出事。

明治十三年十一月二十二日<sup>18</sup>

とあるように、海軍大尉曾根俊虎と同伊藤蒙古は清國の軍備状況を探るべく清國に派遣されたことは明らかである。

曾根俊虎の作成した「清國軍艦一覽表」(下の写真参照)によれば、恬吉、操江、測海、威靖、海安、馭遠の規模がわかる。この 6 隻についてのみその記録を掲げてみた。同表から抽出し作表するに際して、漢字数字はアラビア数字に全て改めた。

<sup>18</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C09114547400。



艦名	性質	馬力	機関	航進	長短廣狭	人員	製造年月	製造地	現泊港湾
恬吉		400	外輪	毎時 12英里	長 27 間 4 尺 巾 4 間 3 尺 深 16 尺	180		清國上海	天津常備艦
操江		425	暗輪	毎時 12英里半	長 21 間 1 尺 巾 4 間 3 尺 7 寸 深 16 尺	120		清國上海	
測海		420	暗輪	毎時 12英里半	長 28 間 巾 4 間 3 尺 4 寸 深 16 尺	120		清國上海	
威靖		600	暗輪	毎時 15英里	長 34 間 4 尺 巾 5 間 4 尺 5 寸 深 26 尺	120		清國上海	
海安	イ製フッカート	1,800	暗輪	毎時 14英里	長 46 間 巾 7 間 5 尺 深 28 尺	600		清國上海	長江・南京
馭遠	同	1,800	暗輪	毎時	長 46 間	600	我明治 16	清國上	上海・吳淞

				14 英 里	巾 7 間 5 尺 深 28 尺		年、清同 治 12 年、 西暦 1873 年	海	
--	--	--	--	-----------	------------------------	--	---------------------------------	---	--

以上のように、恬吉、操江、測海、威靖、海安、馭遠の軍艦としての能力が日本海軍の調査員によって調べられていた。これら 5 艦について日本の記録に残されたものに関して以下述べたい。

同治十二年（1873）建造の海安が明治 9 年（1876）に日本を訪問している。外務卿寺島宗則から海軍大輔川村純義にあてた文書「往第百六十六号」に、

清國江南官備汽艦海安号、客歳渡航揚武艦ノ例ニ倣ヒ、御國へ致遊歴度旨、艦隊長ヨリ申立候ニ付、右之趣、御國へ致照會呉候様、総理衙門ヨリ申啓候旨、在北京森全権公使ヨリ申越候、依之別紙往復書寫相添、此段及御照會也。

九年十二月九日 外務卿寺島宗則

海軍大輔川村純義殿

とあり、清朝側からの紹介文は次の通りである。

大清欽命總理各國事務王大臣 爲照會事。光緒二年九月二十四日、准南洋大臣咨、據總理江南輪船操練事宜、前臺灣道稟、據管駕海安輪船王千總稟、稱閩省揚武輪船、去年曾往東洋遊歷、斯船擬諸仿照揚武駛往東洋遊歷、俾得在船員弁人等熟悉洋面於行船諸務大有裨益、仰懇詳請、先期照會日本國等情、據此詳請轉咨呈等因、前來相應據文照會貴大臣轉咨貴國查照也。須至照會者。

右 照 會

大日本國署理欽差大臣鄭

光緒貳年玖月貳拾柒日<sup>19</sup>

とあるように、後者の文書は、清国の汽船海安号の日本訪問を要請する光緒二年九月二十七日即ち 1876 年 11 月 12 日付の照会に対して、前者の文書は、北京に居る森全権公使から外務卿寺島宗則を通じて海軍大輔川村純義に求められたものであった。

この清国の汽船海安号が来日したのは明治 10 年（1877）12 月のことである。12 月 7 日正午 12 時 30 分に兵庫に入港したことが、兵庫の海軍用所より海軍省に報告されている。<sup>20</sup>そして 12

<sup>19</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C09112208700。

<sup>20</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C09112512100。

月13日午前4時に兵庫を出港<sup>21</sup>し横浜に向かった。横浜には12月16日午前8時45分に入港している。<sup>22</sup>

清国の軍艦が日本を訪問したのは、この海安号が最初では無い。すでに二年前の明治8年(1875)12月に揚武号が来航している。

海軍省神奈川縣へ達 各通

近日清國軍艦揚武號、横濱へ入港ノ趣ニ付、爲心得此旨相達候事。外務

外務省 上申

今般清國軍艦揚武号へ同國水師提督蔡國祥、同副提督蔡國喜並船將英人テレシー等乗組我開港場巡覽ノタメ此程長崎表へ來著候處、去ル二十七日頃、兵庫港へ向ケ開帆候趣ニ付、不日横濱港へ來著可致。同國軍艦ノ我海港ニ來ルハ初テノ儀、且彼官員在留無之候間、尋問等ノ儀、都テ地方官ニ於テ取扱ヒ、猶海軍省官吏同港へ出張別紙ノ手順ヲ以テ長崎港ノ振合ニ準シ接待相成候方可然ト存候。(以下略)<sup>23</sup>

明治8年12月に揚武号が長崎に来航した。揚武号は日本の開港場を遊歴するとのことで、水師提督蔡國祥、水師副提督の蔡國喜そして船將としてイギリス人のテレシーの他イギリス人が2名、清国人が約160名乗船していた。<sup>24</sup>

明治10年に来航した海安号には、次の人々が乗船していた。

清國軍艦海安号入港御届

海安輪船 兵勇四伯名 二千八伯頓 炮二十位

欽差大臣二品銜翰林院侍講 何如璋

欽差大臣三品銜升用道選府 張斯桂

欽賜花翎當駕海安輪船都關府王予照

欽賜花翎正營隊協鎮都督府 徐長順

兵官二十員

管機器五員 煤夫三十六名

大二三夫三名

右ハ本日午前八時四十五分當港へ入艦致シ候ニ付、此段御届仕候

外入第八百七号 二百三十九

<sup>21</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C09112512200。

<sup>22</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C09112512500。

<sup>23</sup> 国立公文書館所蔵：2A00900・太 10301100。

<sup>24</sup> 国立公文書館所蔵：2A00900・太 10301100。

## 横濱碇泊

春日艦々長

十年十二月十六日 海軍少佐磯邊包義

東海鎮守司令長官

伊東海軍少将殿

前書之通届出候条、此段申添候也。

東海鎮守司令長官

伊東海軍少将殿

十年十二月十六日 海軍少将伊東祐磨

川村海軍大輔殿

東壺第四百八十八号<sup>25</sup>

とある。この海安号には、1877年より三年にわたる初代駐日公使となった何如璋が乗船していたのであった。この海安号には正使の何如璋以下、副使張斯桂、参贊官黃遵憲、洋員嘉締、正領事館の范錫朋、副領事館の余瑞がおり、繙訳官として沈鼎鐘、張宗良、潘任邦、馮胎煒、随員には沈文栄、陳文史、廖錫恩、吳廣霈、張鴻淇、陳衍範、何定求、任敬和、劉坤が、親属として何其毅、張子菁、施積型、張德耀、羅貞意等が乗船していた。<sup>26</sup>

明治21年(1888)12月、明治22年1月、2月、3月における山東の芝罘港に停泊していた兵船が日本によって調査されている。

入港			出港		
入港日	艦名	發艦地方	出港日	艦名	着艦地方
三日	鎮西	由 威海衛			
五日	鎮南	由 威海衛	五日	鎮西	向 威海衛
同	揚威	由 威海衛			
六日	操江	由 旅順口	六日	揚威	向 威海衛
			同	操江	向 仁川
八日	測海	由 上海	八日	鎮南	向 威海衛

<sup>25</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C09112512400。

<sup>26</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：A01100165500。

<sup>27</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C10124545100。

十一日	遇順	由 旅順口			
同	泰安	由 仁川			
			十二日	遇順	向 旅順口
			十三日	測海	向 大連湾
			十六日	泰安	向 成山頭
十七日	利運	由 旅順口	十七日	利運	向 威海衛
十八日	泰安	由 成山頭			
十九日	遇順	由 旅順口	十九日	遇順	向 旅順口
同	超勇	由 威海衛			
			二十二日	超勇	向 威海衛
二十九日	鎮西	由 威海衛			
計入港 十二隻 艦数 九			計出港十隻 艦数 九		

とある。この記録から操江が二月六日に旅順口から芝罘に来航し、同日には朝鮮半島の仁川に赴いたことがわかる。また測海が二月八日に上海から芝罘に来航して一三日まで停船し、同日に大連湾におもむいたことがわかる。

艦名	艦種	入港	出港	発艦地	赴艦地	備考
鎮南	ガンボート	二月五日	同七日	威海	威海	
鎮海	ガンボート	二月六日	同七日	旅順	旅順	
利運	運漕	二月九日	同日	西島	旅順	
水雷船		二月十日	同十一日	威海	旅順	
操江	報知	二月十三日	同十四日	仁川	旅順	
鎮南		二月十六日	同十九日	威海	威海	

とある。ここでは操江のみが仁川から二月一三日に芝罘に来航して、翌日に旅順に赴いている。操江の主たる業務は「報知」とあるように情報収集作業に従事していたと思われる。明治27年(1894)年に日清の海戦が始まるが、その頃の清国側の動静を探った日本陸軍の「情報」が残

<sup>28</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：C10124545100。

されている。

同治八年（1869）建造の操江について次のように見られる。

六月二十五日

情報

一、平山八重山艦長ヨリ午後三時発報告

武蔵牙山ヨリ帰着、清國商船昨日一艘來ル。兵凡五百、馬四十上陸、鎮遠號、漢丙、揚威、操江碇泊。<sup>29</sup>

とあるように、清国の軍艦の鎮遠、漢丙、揚威、操江の4艘が、朝鮮半島の牙山に明治27年6月25日時点で停泊していた。

その後の明治27年の日清の海戦において日本海軍に捕獲された清国汽船があった。海軍大臣西郷従道が通達した文書に次のようにある。

先般豊島ノ役ニ於テ捕獲シタル清國軍艦操江ヲ帝國軍艦ト定メラレ度、謹テ奏ス。

明治二十七年八月二十九日 海軍大臣伯爵西郷従道 海軍大臣之印<sup>30</sup>

とあるように、江南製造局で初期に造船された操江が、日清戦争の海戦において日本海軍に捕獲されたのであった。

同治八年（1869）建造の測海に関して明治33年（1900）10月25日付の「清國事件通報」第百三十五集によれば、

電譯 十月二十四日午後七時四十分漢口發

同 二十五日午前三時二十分着

海軍省 佐々木摩耶艦長

着二十三日午前、九江府川上ニテ清艦測海ノ下ルニ會ス。二十四日午後、漢口川下ニテ独逸軍艦「ジユワルベ」ニ會ス。漢口ニ英艦「ダフネ」、「ウードコック」碇泊。

とあることから明らかなように、清国軍艦測海は長江における防備に従事していたことがわかる。

#### 4 小結

上記のように洋務運動時期の中国において近代的な機械産業の先駆を開拓するために1865年（同治四）に上海で創立された江南製造局は、様々な産業面の新機軸を推進するが、その中の重要な部門として造船業もあった。そして同治十年（1871）までに江南製造局において新造さ

<sup>29</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：A06061758300。

<sup>30</sup> アジア歴史資料センター、レファレンスコード：A01200786300。

れた輪船は、全て曾國藩によって命名された600トンの恬吉、1,000トンの威靖、600トン操江、600トン測海であり、1873年（同治十二）には2,800トンの海安が、ついで1875（光緒元）に2,800トンの馭遠が造船される。これら6隻は、清朝海軍の初期の重要な軍艦となり長江以北の海域の北洋艦隊の軍船として利用された。

この6隻の中の最大級の海安号は、明治10年（1877）12月に、欽差大臣何如璋等を乗船させ横浜に入港している。建造当時アジアの最大級の軍艦と呼称された。その後の各船はおもに上海以北の北洋海域における軍船として日本の記録にも見られ、とりわけ操江と測海は、明治21年（1888）12月から同22年2月までの間に、山東半島の芝罘そして遼東半島の旅順、大連さらに朝鮮半島の仁川とを結ぶ海域において活動していたことがわかる。

特に操江は日清戦争中の海戦において日本海軍によって捕獲された。長江口の海防に就いていた測海は、日清戦争後には長江水域の防備に従事していた。日清戦争の敗北は、江南製造局開設当初の建造船にとって、初期の主力船から後退する契機となったと言えるであろう。